



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	二つの大戦の間のカール・カウッキー —そのポリシェビズム・ファシズム観を中心に—
Author(s)	山本, 佐門; YAMAMOTO, Samon
Citation	北大法学論集, 29(3-4), 331-358
Issue Date	1979-03-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/16270
Type	departmental bulletin paper
File Information	29(3-4)_p331-358.pdf



二つの大戦の間のカール・カウツキー

——そのボリシエビズム・ファシズム観を中心に——

山 本 佐 門

目 次

はじめに

第一章 カウツキーとロシア革命

第二章 スターリン体制下のソヴェトロシアとカウツキー

第三章 カウツキーのファシズム観

まとめにかえて

はじめに

世界大戦の時期すでにヨーロッパの社会主義運動の指導者の中で長老的立場にあったカール・カウツキーはその政治的関心の重点をロシアの社会主義革命の成り行きにおいていた。一九一七年の「政治革命」をめぐって、またその後の社会改造の実情をめぐってカウツキーは極めて立入った、しかも非常にきびしい批判を展開しつづけた。しかしこの期のカウツキーの立場に対しては「プロレタリアートの背教者」というレーニン・ボリシエビキの評価が今なお

強い影響力を持ち続けている。しかしその「影響力の強さ」は必ずしも理論的な正しさによるものではなく、現実の政治運動の力関係によって左右された面も強い。

確かにカウツキーはロシアプロレタリアリズム（ボリシェビズム）に敵対的ともいえる激しい批判活動を行った。しかし「社会主義運動」の歴史および現況からみてカウツキーを「背教者」として否定しきってしまうには彼の主張には重要で、示唆的な指摘が含まれすぎていると考える。

この小論では戦間期のカウツキーの政治的立場を考え直すことを基本目標とし、その核心部として彼のロシアプロレタリアリズム観をカウツキーの当時の発言にそくして分析し、これとの関わりでカウツキーのファシズム認識にも言及してみたい。それによってカウツキー評価修正への手がかりを提示したい。⁽¹⁾

(一)「戦間期」のカウツキーの立場に積極的に言及した文献は全く少ない。その中では *Ein Leben für Sozialismus-Erinnerungen an Karl Kautsky* (Hannover, 1953) が最も参考になる。社会主義者としてのカウツキーの歩みについては K. Kautsky, *Mein Lebenswerk*, in: *Ein Leben für Sozialismus* (邦訳「自伝」都留訳『世界大思想全集一四巻—カウツキー』(河出書房、一九五五年) 及び Karl Renner, *Karl Kautsky*, Berlin, 1929) があるが、いずれも一九二〇年代前半までの歩みにしかおぼろげにすぎない。カウツキーの著書目録については Werner Blumenberg, *Karl Kautsky Literarisches Werk* (Mouton & Co., 1960) 日本での参考文献となる文献としては、村瀬興雄「ヨーロッパの社会主義像—カウツキー、ブウアー、第二インターナショナル」(『思想 四八九号』一九六五年)、直井武夫訳『社会民主主義と共産主義の対決』(酣燈社 一九五一年—これはカウツキーの一九三二—一九三七年の論文をまとめたらしい) *Über Sozialdemokratie und Kommunismus* (Von David Schub und Joseph Shaplen, München, 1948) の邦訳であるが、この論文集自体の出典が全く不明確であり問題を示しているのみ。

カウツキーはロシア革命への当初からの反対者では決してない。「二月革命」の成功に対して、「まさか戦争の途中で革命が起るとは」と驚きの意を示しつつ「凍りつく専制の宮殿をゆさぶり、きびしい冬のような果てしない戦争を弱める春の嵐が吹きまくっているのは今日ネバ河の地ロシアだ」「目下の戦争が露日戦争に比してその暴力性においてはるかにすさまじいように、現在のロシアでの革命は一九〇五年のそれよりも深くロシア帝国をゆるがしそうだし、もしそうだとすれば、その作用はロシアをはるかに越え、全ヨーロッパの新たな時代の始まりになろう」と強い歓迎と期待の立場を公言している。⁽¹⁾

そしてこの革命の性格と展望については、「後進国の故に挫折の運命にある」という一部の社会民主主義者に反論しつつ、同時にこの革命の主導力が都市のプロレタリアートにありながらロシアの「後進性」(資本主義の発達水準の低さ、専制的政治体制)によって革命はさしあたって「絶対主義」的国家形態から「民主主義」なそれへの転換という「ブルジョア民主主義革命」⁽²⁾たらざるをえないとした。

そして「都市の革命的プロレタリアート」の差し迫って求めるべきは「ロシア国家の民主化」「私的企業内での労働者の向上」「農村住民への配慮」であると主張している。「民主化」についていえば一般人民の「自由と政治的権利の拡大、国家、地方統治機関の人民奉仕機関への転換」であり、「労働者の向上」とは「八時間労働、失業保険などの労働者保険制、の実現、安価な生活手段の確保」をあげていた。「農村住民への配慮」は特にカウツキーが強調した点であり、ロシアにおいては「大都市ではプロレタリアートが決定的な役割を演じているが、農村住民の量的優位は今でも圧倒的であり、プロレタリアートが目下の立場を保持できるか、どのくらいまでできるかの決定的なものはこの農村住民であるし、デモクラシーが維持されるかどうかも彼等に左右される」とし革命が農村住民に経済的利益をもたらし、とくに土地改革の必要性を訴えた。一方「私的生産の社会的生産への転換」という「社会主義」は目

下直ちに実現されえないし、求めるべきでない⁽³⁾と判断した。

そしてこの「民主主義革命」の完成をめざすために、民主的手続きによる総選挙に基づく「憲法制定議会」、それまでの暫定処置として変革をめざす諸政治勢力の「連立政府」が、カウツキーによって期待されていた。

しかし彼の「民主主義革命」としてのロシア革命という生き生きとした願望はわずか数ヶ月で霧散した。ボリシエビキに主導される首都ペテルスブルクでの武装蜂起、憲法制定議会の解散、ソヴェトによる統治、という「第二の政治革命」⁽⁴⁾十月革命以降のロシアの政情の急変によってである。そしてカウツキーのロシアの友人たるメンシエビキの指導者が迫害され、革命の方向が彼の予測と離れてゆく中で、革命の現実、そしてそれを主導するレーニン等のボリシエビキの見解を激しく批判しはじめた。一八年に入り、カウツキーは『民主主義か独裁か』『プロレタリアートの独裁』という本を出し、ボリシエビキ路線に基本的な疑問を表明し、このきびしいボリシエビキ批判に対し、レーニンはカウツキーを「プロレタリア革命の背教者」と刻印し、全面的に反論した。しかしカウツキーのボリシエビキ革命批判は強まるばかりで、次の年には原則面のみならず、ロシアの一ケ年の「実験」への具体的批判をも含んだ『テロと共産主義』を公刊するに至った。

十月革命を含んだこのソヴェトロシアの初期の歩みへのカウツキーの疑問・批判の核心は何であつたらうか。一九一八年時点での次のような主張は彼のその後も続くボリシエビキ批判の要をなしている。

「今まで社会民主主義の陣営では社会主義は発展した資本主義的生産様式での民主主義から起きるにちがいないということが当然のこととして妥当していた。それに反しボリシエビキはこの考えを変え、自らの窮状で全く別の、全く新たなものを対置した。彼等は民主主義に対立させ独裁 (Diktatur) を、しかもそれを過渡期の例外状態のみならず、資本主義的生産様式から社会主義的なそれへの移行時での常態的な民主主義への代替物として求めているのであ

る。彼等は独裁をどのような状態でも、軍事独裁的君主国のみならず西ヨーロッパの古い民主主義国に対しても。彼等はまたそれらの勝利を助ける闘争組織——「労・兵・農レーテの独裁を求めろ」⁽⁵⁾

この批判は二つの論点を含んでいる。第一には、「民主主義否定、独裁志向」という形でのポリシェビキ批判の視点である。新生ソヴェトロシアの現実についていえば、半ばクーデターの普通選挙に基づく憲法制定議会の解散、それに替るソヴェト組織の統治機構化、ポリシェビキ外の社会変革志向政治勢力への弾圧、反革命的な資本家、大地主のみならず多くの非ポリシェビキの人民の政治的権利の剝奪、が起きていることを糾弾しており、この時点ですでにロシア革命の真相を「プロレタリアートの独裁というが、それは初めからプロレタリアート内部での一つの党の独裁であり、しばらくはプロレタリアートの多数派の少数派への独裁たろうとしたが、今やそれすらも疑わしくなった」と判断し、「ポリシェビキ独裁」と刻印した。その後一、二年でこの評価は「プロレタリア貴族制」、「国家奴隸制」とさらに悪化してゆく。

しかしカウツキーのポリシェビキ革命批判は「民主主義の否定」という革命形態にあっただけではなく、その方向性（目標）にもあつた。結論的にいえば、レーニン等ポリシェビキはカウツキーが忠告し、期待した「革命的プロレタリアートの道」とは異なり、ロシアの経済的・政治的發展水準を無視し、直接かつ、急激に「社会主義」への道に歩み出ようとしていることへの批判であつた。

カウツキーの見解によれば社会主義への道に歩み出るには、資本主義的生産様式の発展に基づく二つの基本条件——工業生産力の上昇と革命の主体たるプロレタリアートの量的、質的（階級意識）成熟——の存在が不可欠であり、ロシアの現実はおおその水準に達しておらず「今ここでなされるべきは、ブルジョア革命の後半であり、決して社会主義革命の初めではない」のであり、それに対しポリシェビキ革命の試みは「自然な發展段階をとび越え、道を誤つ

説
た」「苦しみのあまり早産を試みようとする婦人」のような行為と判断されている。⁽⁷⁾

論

このようなカウッキのロシア革命批判の視点はさらに二つの「教条的」ともいべき彼の原則的革命観に結合されていた。一つは「段階的革命論」ともいべき「社会の発展法則」にそった革命定式の信奉である。もう一つは「民主主義」への絶対的ともいべき高い評価である。次のカウッキの主張はこの二つの原則への信奉ぶりを極めてよく表わしている。「世界各国はかなり異った経済的、政治的發展段階にある。国家が一方で資本主義的に、他方では民主主義的になればなるほど、社会主義に接近する。資本主義的工業が發展し、その生産力が上昇し、その富が豊かになればなるほど、労働が社会的になり、プロレタリアートの数が増加する。国家が民主主義的になればなるほど、プロレタリアートは良く組織され、訓練される。民主主義は時としてプロレタリアートの革命的思考を妨げるが、彼等が政治権力を獲得し、社会革命を遂行しうるほどに成熟するに不可欠な手段である。どこの国でもプロレタリアートと支配階級の間闘いがあるが、その国がより資本主義的・民主主義的であればあるほど、この闘いでプロレタリアートは一時的に勝利しえるのみならず、その勝利を確たるものとする見通しも強まる。この条件下で国家の主導権を掌握した時プロレタリアートはすぐに経済的發展に社会主義的方向づけを与え、一般的な福祉向上のために必要な物質的・精神的な権力手段を持ちえるのである。これらのことは経済的・政治的後進国にとっても本物の手本となる」⁽⁸⁾

そして「工業化」「民主主義」の進展を社会主義革命の基本前提とする「先進国革命論」ともいべきカウッキの主張は「平和的変革」「多数者革命」への強い展望をも導き出している。「プロレタリアートが国民の多数派を形成し、この多数派が民主主義的に組織化されているところでは、内乱と独裁は必然的過程ではない。そしてここにもみ社会主義的生産の条件がある。そして我々はプロレタリア独裁については民主主義を土台とした彼等の支配以外のも

キーによって与えられていた。そしてこの選挙権とともに、人民の政治意識と自治能力を高めるために、言論・結社・集会の自由、労働者の団結権、の保障も不可欠とされた。⁽¹¹⁾

このような民主主義論に立つならば、民主主義を、議會制を「ブルジョア」的、「プロレタリア」的と分離し、双方を越え難い異質なものとする主張は認め難く、「普通、平等選挙権を持った民主主義はプロレタリアートが闘い、闘ったもの」「議會制は常にブルジョア的ではなく、社会主義的多数派が議會に入りこむや、議會制は根本的に変化してしまう」という見解が強調される。⁽¹²⁾

そしてカウツキー的民主主義観に立てばボリシエビキの主張する「プロレタリア独裁」の考えこそ、民主主義を原理的にも、制度的にも否定する敵対物なのであった。そしてボリシエビキの「プロレタリア独裁論」は「独裁」を支配の「状態」(Zustand)ではなく「統治形態」(Regierungsform)と曲解しており、その主張は實際上プロレタリアートの一部の他の人民への暴力的支配をもたらすものと鋭く指摘した。

「統治形態としての独裁は反対派の権利剝奪と同義である。反対派は選挙権・言論・結社の自由を奪われる。勝利しつつあるプロレタリアートがこんなやり方を必要とするのだろうか、こんなやり方の助けで最善の、あるいはこんなやり方でのみ社会主義が実現できるか疑問である。統治形態として独裁をとらえた時階級としての独裁は考えられない。階級は支配するだけであり、統治しえないからである。独裁を支配の状態ではなく、一定の統治形態と考えた場合独裁はプロレタリアートという階級のそれではなく、一プロレタリア政党の独裁になってしまう。そしてさらにプロレタリアート自体が異った政党に分かれている時、問題は複雑になる。これらプロレタリア党の一つによる独裁はもはやプロレタリアートの独裁ではなく彼等の一部の他の部分への独裁になってしまうのだ」⁽¹³⁾

そしてロシアで今多くの人民の支持を得るのになぜ「独裁制」を押し進めねばならないのかと反問し、「幸運にも

ポリシエビキ独裁の失敗は革命の崩壊と同義という事態にはなっていない。革命の本質的な成果は独裁を民主主義に置き変えるのにうまく成功した時に救われる」と述ベソヴェトロシアが「民主主義の道」へ立ち返ることを強く求めた。⁽¹⁴⁾

しかしロシア革命をめぐる論争は大戦終結と革命の進行という政治的激動期の真只中で展開され、現実にはポリシエビキ路線の敵か味方かという形で機能していった。

ロシア国内ではレーニン・ポリシエビキとカウツキーの僚友メンシエビキの指導者達の生死をかけた闘争がつづいていた。さらにレーニンにとってカウツキーは「第二インターナショナル崩壊」をもたらし理論的支柱であり、彼のカウツキー批判は「社会主義者間の論争」というより「革命の敵」への攻撃であり、この度も「背教者カウツキー」と位置づけきわめて乱暴な論法をとりつつカウツキーの「反革命の本質」を浮き立せようとした。⁽¹⁵⁾

このような状況の中でカウツキーの非常に能動的な「革命批判」はポリシエビキの指導者にはほとんど受け入れられなかった。

しかしカウツキーにとっては「資本主義熟成」を前提とした「平和的、多数者革命」という革命観は戦前から彼の「基本信念」であり、この信念に真向から対立しつづけ、ロシアのカウツキー派ともいべきメンシエビキ弾圧を強めるレーニン・ポリシエビキの「暴挙」は到底見逃しえず「社会主義建設」の現状批判を含んだ激しいポリシエビキ革命攻撃をさらにつづけた。

十月革命後二年足らずのロシアの現実にはカウツキーにとって全く否定的にみえた。

経済面では農民からの収奪により工業化が進んでいるものの、工場でも労働者の自由は骨抜きにされ、官僚支配が強まり一種の「国家資本主義」ともいべき事態になっており、「新たな生活形態どころか野蛮状態への逆行」と結

説論づけ、また政治面ではポリシエビキが権力保持のため、一層軍事的、官僚的装置に依存し、労働者レーテも党に全く従属的なものに変質し、反対派は「反革命者」として弾圧され、言論統制に始まった「民主主義」の制限は反対派的人民への大量テロルにまで進み「恐怖の支配」といえる状態だと非難した。⁽¹⁶⁾

そしてその現状と見通しを次のようにまとめる。「この状況で民主主義へ徐々にもどるために独裁を崩壊させることはほとんど不可能である。ポリシエビキは自らを維持するために官僚主義、軍国主義、資本主義にあらゆる可能な譲歩を行おうとしている。しかし民主主義への譲歩は彼等には自殺行為のようにみえる。とはいえ民主主義のみが内戦を終らせ、ロシアを再び経済的上昇とより高い生活形態への発展に導く可能性をもたらすのだ。民主主義なしにはロシアは破滅する。民主主義によってポリシエビズムは破滅する。事の帰結は予測できる」

カウツキーは激しいポリシエビキ路線批判の中で「民主主義を通じての道」こそ社会主義への唯一の選択という立場と、ソヴェトロシアに対し「民主主義かポリシエビキ独裁か」の二者択一を求める評価を持つまでに至ったといえよう。⁽¹⁷⁾

さらに「世界革命」をめざそうとするポリシエビキの対外的な影響については、西ヨーロッパで「ポリシエビキ型革命」をめざす人々があらわれ、現実には労働人民が長年の闘争でかちえた「普通選挙制をともなった民主主義」への不信をあおりたて、同時に社会主義政党を分裂、同志討ちさせるといふ極めて有害なものになっていくととらえ非難した。⁽¹⁸⁾

(一) K. Kautsky, *Der Eispalast*, in: *Die Neue Zeit*. (以後 *N. Z.* と略す) Jg 35. Bd 1, S. 51, *Die Aussichten der russischen Revolution*, *N. Z.* Jg 35. Bd 2, S. 9.

(二) *Ibid.*, S. 10-12.

(17) Ibid. S. 146. 「民主主義の道」については、Ibid. S. 145. ここでは「選択は、民主主義か内乱しかないゆえに、我々は、社会主義は民主主義の土台では不可能であることが歴然としているところ、人民の多数がこれを拒否しているところでは、社会主義の時間がまだ到来していないと判断する、一方ポリシエビキは社会主義はどこでも少数派によって、多数の者に押しつけられねばならず、それゆえ社会主義は独裁と内戦によってのみ実現されると考える」と述べている。

(18) Ibid. S. 146-154. 「世界革命の見通し」

第二章 スターリン体制下のソヴェトロシアとカウツキー

十月革命後十年、ロシアでの社会主義建設は戦時共産主義から新経済政策、そして二八年から第一次五ヶ年計画へと入った。ソヴェトの最高指導者もレーニンからスターリンへと移った。

しかしカウツキーのソヴェトロシアそしてポリシエビキへの攻撃の姿勢は不動であった。むしろ革命当初での彼の批判点は一層確認されたという立場をとり、さらにソヴェト体制変革の見通しをめぐってカウツキーは武装蜂起の可能性をも強調し、この体制の現状を部分的に肯定するO・パウアーら社会民主主義左派の指導者とも激しく対立してしまう。

まずカウツキーは一九三〇年頃のソヴェトロシアの現状をどうとらえたか検討しよう。三月革命以降ロシアの労働者、人民の状態は悪化の一途をたどっているというのが彼の基本認識である。「ロシアのプロレタリアートは彼等が達成した高さから一九一八年以来年々深く押し下げられている。彼等は社会主義に接近するどころか一層そこから遠ざかり、一層労働過程での『自治』の能力を失っている。国家奴隷制は奴隷の使役者がコミニニストと自ら名乗ることによって、社会主義になってゆくものではない」「我々がロシアで見ているのは計画経済などではなく、絶えざる

プロジェクトの入替え、諸計画経済である。それらはしばしばすごいプロジェクトであるが、すべては始められるだけで、決して無事完了したことはなく、繰り返し修正され、つぎはぎにされつづける。その計画が不充分的なものとして新たな「改善されたもの」に取り替えられるか、破棄されるまで。今我々がソ連でみるものは命令、命令の修正、そして無秩序である」

そして五ヶ年計画の破産はすでに明白になっており、スターリンとその取巻きはこの責任をだれかになすりつけようとするようになってきた。そして、その実情については、消費物資を切りつめ、生産手段の量産に力をそそぐとしたが、軍事工業優先、交通手段の整備の遅れ、技術者の不足で全くうまくゆかず、労働人民は消費物資の高騰に苦しめられ、貧困と無気力に陥っており、また農村のコルホーズは計画倒れであり、収穫は後退し、飢えの苦しみが広がっているとし、「ポリシエビキはほぼ五ヶ年にわたりロシア人民の病体にあれこれ手術を試みたが病状はかえって悪化した」と結論づけた。⁽²⁾

こうした現状認識はソヴェトロシアは「社会主義国ではなく資本主義類似物」という判断をも生むにいたる。「目下ソ連でおきているものは社会主義ではない。それとは逆のものだ。社会主義は今日権力についている不法篡奪者を強制的に取り除いた時のみ達成しうる。それゆえ社会主義を求めるロシアの人民大衆は生産手段の領有に関し、資本主義国の人々と同じ問題に直面している。この事態はロシアでは不法篡奪者がコミュニニストとよばれていることで決して変るものではない」。まさにロシアでも再度「社会主義革命」を必要とする主張である。⁽³⁾しかも「民主主義」の人民にとっての意義を非常に重視するカウツキーは「社会主義」の核心たる生産手段の社会的所有実現の可能性に関して次の如くいい切る。「ソヴェトと西ヨーロッパの間の相違は、ロシアで生産手段の扱いはただ集権化されただけではなく、絶対主義的な国家装置によって支えられていること、その労働者は我々が知っているように自由な組織、

自由な新聞、自由な選挙なしで、全く抵抗力がなくなっていること、これに対し発達した資本主義国での労働者は今日すでに資本の独裁に様々な制限を置くほど強力であり、労働者に好都合な議会選挙の作用によって重要な経済的独占体の社会化を可能にするほどの政治的力関係にあるということである」⁽¹⁾

すでにカウツキーの新生ロシア評価は「帝国主義国」人民の方がはるかに人間的な状態にあり、社会主義実現に近しいところまで達していたのである。

それではソヴェトロシアの将来はどうか、そしてロシアの人民に何を期待すべきであろうか。カウツキーの求めるのは当然にも「ロシア民主主義の道」である。

「ソヴェトの人民もまた民主主義を必要とするのだ。民主主義のみがまひした経済を再び活性化させ、農民や労働者に可能性を開き、知的向上をもたらすのだ。そのみがロシア人に多くの衣類やパンをもたらすのだ。デモクラシーのみが労働大衆に、民主主義の可能性を、それらの本当の向上に役立つ力を、高めるであろう⁽²⁾」。しかし民主主義の実現の見通しはどうか。「我々がソヴェトの民主化をどのように考えようと幻覚に落ち入らないとすれば、民主化とはソヴェトを抑圧の機構から解放の機構に、現在あるような一握りの少数者の全一支配から、解放の装置に、それゆえポリシェビキ崩壊の装置にかえること以外にない。本当の民主主義が到来すれば、ポリシェビキは人民の圧倒的多数に逆らっており、すべての支柱を失っていることが明らかになる。それゆえソヴェトの民主化は共産党に抗し難い圧力を及ぼすことに成功した時にのみ成功しうるということを確認せねばならない」⁽³⁾

そしてこの民主化の道としてカウツキーは「大衆の蜂起」か「ポリシェビキ内での反対派の勝利か」の二つの可能性を示し、主観的願望としては「流血」と「カオス」を避ける道を期待しつつも「民主化の推進（独裁の緩和）はポリシェビキの自殺行為であること」「ポリシェビキは恐るべき権力手段を独占していること」を根拠とし「大衆蜂起」

にのみロシア人民向上の現実的可能性を求めている。⁽⁷⁾

カウツキーの「大衆蜂起」による「ボリシェビキ政権打倒」の公言は当時のヨーロッパの社会民主主義の指導者達そして社会主義労働者インター（第二インター）内でも大きな反響をよびおこし、ボリシェビキ革命とソヴェトロシアの現実になお一定の肯定的評価を与え、その将来の内部からの民主化とボリシェビキとの協働の可能性を信じるカウツキーの僚友——社民左派グループとも激しく対立し、カウツキーの主張が社会主義インターで否定されたり、彼の論文の掲載が拒否されるほどの深刻な事態にもなった。⁽⁸⁾

「民主化のための大衆蜂起」に反対するO・パウアーやF・アドラー、T・ダンは、それによって生じる「反革命」——旧勢力の復帰の危険性を強く指摘している。しかしカウツキーはこうした見解を二つの根拠から否定する。一つはソヴェトの現状を最悪のものと判断することである。「私の想像力によっても、今日のソ連の状態ほど恐ろしいものはない。もし仮借なきまでの独裁への我々の抵抗の重大さが、この独裁の崩壊によってなお恐ろしいものが生じるかもしれないという心配により弱められたらきわめて痛ましいことだ」「ボナパルティズムはもっぱら政治的な反革命であり、民主主義を除き、軍隊や警察の全能によって大衆の政治的自由を奪ってしまう。しかし革命によってもたらされた経済的な土台には手を触れない。(中略)ボリシェビズムはそれに反し、革命の政治的成果のみならず経済的なそれをも除いてしまう。労組や企業レーテは従属せしめられ、全生産装置は全く無能で、全く腐敗し、全く狂気じみた官僚層の統制下に置かれ、無力化してしまった。(中略)それゆえボリシェビズムはボナパルティズムではなく、ボナパルティズムよりもずっと悪い」

それゆえボリシェビズム打倒後にくるものはジャコビニズム打倒後の反革命ボナパルティズムではなく、今よりベターな体制を期待しえるとした。

もう一つの「蜂起論」の根拠は反革命勢力の弱さと民主主義を求めるロシア人民の変革能力への過大ともいふべき高い評価であった。「今日のロシアの国家形態は全く異常で、従つてその克服にも異常な形をとらざるをえない。しかし農民、労働者が自らを自由に処しうるようなところではそれらはたえず組織の民主主義的な形態を求める。ロシアの農民、労働者が今日彼等を支配している人々——ポリシエビキを打倒した時これと別のように振舞うと考える理由はどこにあるのか。あるいは彼等の意志に反しそのような独裁を彼等に行う勢力は一体どこにあるのか。そのような恐れは今日のロシアの社会構造の分析からではなく、全く別の状況から生じた昔の経験からのアナロジーからおきているのである」。「白色独裁」とは何ぞや、白衛軍として通常ツァーリズムや大地主の復帰を求める勢力を考える。それらは一九一八——二〇年のロシアの内戦では意義をもった。今日なおこの勢力は若干残っているがロシア人民——その労働者、農民には全く影響力を失っている。この点でいえばロシア革命はラジカルに作用したのだ」⁽¹⁰⁾

しかしカウッキも直接ロシア国内での「大衆蜂起」を呼びかけたわけではない。彼の主張によれば (1) 社会主義インターの公式見解として、ロシア人民の蜂起の可能性を見込みのない、有害なものとして否定しることに強く反対する (2) 西ヨーロッパの社会主義者、労働人民の中にあるソヴェトロシアに対する幻想を打ち壊す (3) 「ロシア政府の道具」たる共産主義インター（コミンテルン）との各国での妥協なき闘いの遂行、に実践的な意義が求められていた。⁽¹¹⁾

それではポリシエビキの対外的にはたす役割についてはカウッキはどう評価していたであらうか。

「世界革命」と称して「ロシア型独裁」をコミンテルンを通じ各国に樹立しようとしたが、全くの失敗に終り、現実には各国の共産党は「モスコの権力者」に従属し、民主主義を攻撃し、社会民主主義勢力の分裂、弱体化に主力をそぐ「反動の尖兵」的役割をはたしているという全くの否定的評価であった。

「資本主義ではなく、民主主義の否定がすべての国の今日のコミュニニストの求める最も重要な課題である。この政策によって至る所で反動の先導者になっている。資本家はもはやソヴェトロシアを恐れず、手助けしている。五ヶ年計画全体は世界の資本家がソヴェトにより良い生産手段を供給してくれるとの期待に基づいており、この期待は裏切られなかった。経済同様政治的にも資本家はコミュニニストをもはや恐れていない。ムソリーニの勝利を助けたのは少なからず彼等だし、ヒットラーに対しても同じ役割をはたすことになろう。フランスや他の国でも反動派がコミュニニストのおかげでかなりの議席をえた」⁽¹⁹⁾「プロレタリアートを弱め、その敵を強めることがコミンテルンの政策の結末だ。これは偶然ではなく、党、国家、インターナショナルでの独裁、レーニンが三十年前に打ち立て、ポリシエビキの背骨となったあの独裁の政策の当然の結果である」

そしてコミュニニストと社会民主主義者の統一闘争の見通しについても、「理論的相違や瑣末なゆき違いでなく、独裁の現実」が両者の協働の最大の障害になっており、コミュニニストがこの独裁の政策を放棄した時にのみ「統一戦線」が可能になるとし、目下の両勢力の協働の見込みも社民勢力の譲歩の必要性も強く否定し、バウアーやアドラーの見解と対立した。

大恐慌とファシズム勢力台頭のこの期に、カウツキーのポリシエビキ・コミンテルンへの否定的評価が極点に達し、しかもそれを公言しつづけた政治的意味は重大である。

- (一) K. Kautsky, Die Aussichten des Sozialismus in Sowjetrußland, in: Die Gesellschaft. Jg 8, (1931). Bd 2, S. 436, 443.
- (二) Ibid, S. 443, 40-41 K. Kautsky, Die Aussichten des Fünfjahresplanes, in: Die Gesellschaft. Jg 8. Bd 1, S. 255-262.
- K. Kautsky, Demokratie und Diktatur, in: Der Kampf. Jg 26, (1933). Nr 2, S. 50-53, 参照。
- (三) Die Aussichten des Sozialismus in Sowjetrußland, S. 437-438.

- (4) *Ibid.*, S. 440.
- (5) *Ibid.*, S. 444. カウツキーはこの期には「民主主義によってしか社会主義への道はありえない」という立場を明確にしており、「暴力革命」の可能性を認めようとするO・ハウアー等オーストリア社会民主労働党指導部の見解と対立を深めた。
Demokratie und Diktatur の「民主主義」「政治における暴力」の章を参照。
- (6) K. Kautsky, Sozialdemokratie und Bolschewismus, in: Die Gesellschaft, Jg 8, Bd 1, S. 62.
- (7) *Ibid.*, S. 62-71, 「連体制の民主化」「農民蜂起」の章参照。「共産党の支配は継続した無制限な独裁の上に作られている。そしてこの独裁の緩和はこの独裁の死をもたらすであろう。私は独裁の緩和を歓迎すればするほど、敵が自殺する日が来ることをあてがって我々の政策を考えるべきではないと考える」(*ibid.*, S. 63)とも述べている。
- (8) F. Adler, Zur Diskussion über Sowjetrußland, in: der Kampf, Jg 26, Nr 2, S. 58-69, 参照。これはカウツキーの「連批判」の論文掲載をめぐっての「カンフ」編集部F・マトラとカウツキーの手紙のやりとりの公表である。なおこの時のカウツキーの「ソウエトロシア批判」の論文は「社会民主主義左派」とりわけオーストリア社民党指導部との論争の中で書かれたものである。カウツキーとハウアーのこの期の論争を整理してみることは重要であるが、今後の課題にしたい。なおO・ハウアーのオーストリア社民党指導部の立場をめぐっては、大著 Norbert Leser, zwischen Reformismus und Bolschewismus (Europa Verlag, 1968) があり Otto Leichter, Otto Bauer (Europa Verlag) も参考になる。邦語論文では、村瀬興雄「一九三〇年代のオーストリアマルクス主義——オッター・ハウアーの理論を中心に」(季刊 社会思想 三一「二」一九七三)がある。なお『社会思想』のこの号は「オーストリアマルクス主義特集」で、村瀬論文のほか、矢田俊隆「オーストリア社会民主党的民族理論」、オーストリア社民党の「リニン綱領」(一九二七年)の訳、前記のレーザーの文献紹介が収録されている。
- (9) Sozialdemokratie und Bolschewismus, S. 58-59, 61.
- (10) Demokratie und Diktatur, S. 54-56.
- (11) Demokratie und Diktatur, S. 56-58, Sozialdemokratie und Bolschewismus, S. 66, Kommunismus und Sozialdemokratie, in: Die Gesellschaft, Jg 9 (1932), Bd 1, S. 274-278, 参照。
- (12) Demokratie und Diktatur, S. 57, Kommunismus und Sozialdemokratie, S. 277.

第三章 カウツキーのファシズム観

三〇年代に入り、カウツキーはポリシエビキ批判とともにファシズムとくにナチズムの台頭と「民主主義体制」の成り行きにも強い関心を示している。当時すでに彼の活動の基盤はドイツ社会民主党（SPD）からオーストリア社会民主労働党（SPÖ）に移っており、経済的・政治的混乱を深めるワイマル共和国、SPDへの発言はさほど多くはない。しかしドイツファシズム（ナチス）との関わりで重大な政局を迎えた時々、両党の中心機関紙にカウツキーは自らの見解を公表している。

ここではこの見解の概要を紹介する形で、カウツキーのファシズム観の特色を検討したい。

まず彼はナチスの大進出によって共和制の重大転機となった一九三〇年九月のワイマル共和国議会選挙の直前にSPD中央機関紙フォアベルツの第一面に「社会民主党候補のために全力を」という檄文を出している。⁽¹⁾

この檄文において最初に「九月一四日の選挙はドイツ共和国の運命にとって決定的な闘いである」と述べ、このドイツの現体制を脅やかす二つの勢力に言及している。

第一に敵として取り上げられているのはナチスとコミュニストであり、それらは戦争時の思考様式、活動方法をそのまま持ち込んだ現状破壊勢力とされ、両者を並列させその性格を次のようにまとめる。「ナチスの目標はコミュニストのそれと同じく、ただ破壊と取奪である」「ナチスの指導者はコミュニストのそれと同じく多数派になるということを本気に考えているのではなく、一揆それゆえ独裁の樹立を期待している。これは発達した国々では内戦と経済的崩壊に進むことを意味している」「ナチスやコミュニストが国会に代議士を送ろうとしているのは労働大衆のための立法活動に加わるためではなく、議会を混乱させ、妨害し、それによって、議会議主義のマヒをめざそうとしてい

説
るからである」

論
こうした「左・右のラジカル派」の拡大は対外的にはドイツの信用を下落させ、国内的には政治的、経済的不安を増幅し、恐慌を強め、貧困を増すだけときめつけた。

他方の危険は大地主、重工業者、銀行家など「大搾取者」ともいうべき勢力によってであった。彼等は経済復興の中で自らの力を回復し、大恐慌によって労働大衆の抵抗力が低下してきたのに乗じ、帝政期の特権的な立場の回復をめざし、議会制を廃し、独裁的な統治の樹立を求めていると非難した。

これに対し社会民主主義者の目下の中心課題は「生産の社会化の増進」にあるのではなく、「一九一八年の革命の成果の防衛——民主主義的共和国、八時間労働制、企業レーテ、失業保険制、諸外国との了解政策の推進」にあることをも強調した。

そしてこの共和国防衛闘争の成否は社会民主党の進出にかかっているとしつつも、社民勢力単独での勝利は困難とし、ねらいは違っても現体制維持をめざすブルジョア諸党派との連立政権以外の道はないと強調した。⁽²⁾

次いで三二年の正月カウッキは再び「フォアベルツ」に一面全部を使って「一九三二年の課題——ヒットラーに権力をとらせるな、社会民主主義は勝利せねばならぬ」という訴えを発表した。⁽³⁾

ここではまずドイツ人民の不安感の強まりと「ヒットラー主義」の台頭に言及し、経済恐慌と苛酷な平和条約に基づく混乱は国民の中に現秩序に対する不安、不信を異常なまでに広め、奇蹟とメシアを求める声が増大しており、この機運に巧みに呼応しているのがナチス・ヒットラーであり、ヒットラーは「荒療治のコースにドイツ人民を引っ張りこむため国家権力を求めはじめている」と分析する。

そしてヒットラー運動とその支持層とのつながりについて「貧困化した中間層、それに相当の労働者層もこの運動

に流れこんでいる。資本家そして大農業主も、自立的に考え民主主義的に組織されたプロレタリアートに自らの最も危険な敵を認めるゆえにとりわけヒットラーを支持している」ととらえた。

そしてこの民主主義の最大の敵「国家社会主義者」との闘争に言及して、とくにナチスに政権をとらせ、その大失敗をあてにする自陣営内の待機主義的楽観論をきびしくいましめている。「(政権をとった)ヒットラーはまもなく彼等では手に負いきれない困難に直面し、多くの支持者が失望し、彼等から離れてゆくであろう。しかしヒットラーは自ら支配の座を明け渡すことはありえない。そこで民主主義再建のためのきわめて疑わしい闘い——恐るべき内戦を行わねばならない。これによってドイツの新たな上昇の土台が築かれるかもしれないが、つぐない難い破壊ののちはじめて実現されるものであり、こうした事態の到来を避けるためにさしせまってヒットラーの権力獲得を妨げるよう全力をあげねばならない」

そして一九三二年は「形式をめぐってのみならず、本質的な内容面をも含んだ民主主義維持の闘いの年だ」と訴えた。

さらに民主主義の積極的意義についても「民主主義が失われれば、それとともに、失業保険制も八時間労働制、企業協議会も、統一協約も、スト権も失われてしまうのだ。民主主義なしには軍備の縮少もなされないし、あらゆる人民の負担、対立、国際関係での不信、不安の源泉も取り除かれないうままである。そしてドイツ共和国は今や民主主義の危機の主戦場である」と強調し、「ドイツでの民主主義のための闘争の背後には世界の全民主主義がついている。なぜならドイツファシズムの勝利はドイツ外でのファシズムの勝利でもあるからだ」とし、ドイツでの当面の反ナチ闘争の重大性を指摘している。

そしてこうした反ナチ、反ファシズムの労働人民の一致した闘争の最重要性を説くとともにコミュニストの役割に

も言及し「多くの粗野な人々は深く考えず、天国をごまかし、約束する手品師に屈服している。一方はモスコウのクレムリンの君主に、他方は自らもまた重工業者の番頭にすぎぬミュンヘンの褐色館の支配人の命令に。こうした左右のプロレタリアートによってほどドイツのプロレタリアートの任務が危うくされることはない。これらのうち民主主義にとってより大きな危険は国家社会主義者であり、コミュニストは民主主義戦線を弱めている。本当の危険は右にあるのだ」とし、非難している。

この訴えはナチスを主敵に据えた民主主義擁護を中心内容としており時機にかなったものといえるが「ヒットラー主義」の構造、とくに経済的支配層とのつながりでは先の檄文と同様不明確である。

第三には一九三三年四月、ナチスが政権をとり、その独裁体制の確立の中で、SPÖ機関紙「カンフ」に「ドイツ国家社会主義勝利のいくつかの原因とそのもたらすもの」という論文を出し、ドイツファシズムの目下の勝利の原因の分析と社会主義勢力の抵抗の見通しについて発言した。⁽⁴⁾

この論文では社・共両党あわせ千三百万近くの闘争者を持ったドイツ社会主義勢力がドイツファシズムの独裁化の強まりに対し積極的抵抗なしに無力化させられた原因は何かまず問うている。

この点についてカウツキーは「ヒットラー主義の力の源泉」という見方でまとめている。

「ヒットラー主義は複雑な現象である。その力の源泉の一つは経済恐慌である。議会はそれを封じ込めえなかったゆえに、この恐慌によって窮状にあえぐ中間層や、未熟、未組織の労働者の中で人気を落してしまった。この議会を資本家もまた憎んでいた。議会が社会主義者に、資本家にとっての危険な活動の場を与えるゆえに。彼等のいずれにとても議会に対立しそうにみえるもの——独裁が人気を得た。しかしそれにヴェルサイユの平和から生れた報復主義運動が加わった。それは高まりつつあった独裁政治に有利に作用し、その最強の統治手段になり、その支配方法に

恐るべき特色を与えた。この二つの要素にさらにナチスの国家暴力の領有が加わった。これこそどのような政党も抵抗しえぬ権力を生み出したのだ。そこからドイツのマルクス主義の今日の状態がかなり明らかになる。それは時々の個人の態度を責めるにはあまりにも巨大なファクターであろう」

そしてナチスが現在なお「迷える大衆」からの熱狂的な支持を得つづけており「カップ一揆」の時のように「独裁者」に抵抗する社民勢力に圧倒的な人民の支持がある状況とは全く別だと判断し、将来の見通しについても、ナチスの理念は矛盾だらけで、現在の窮状をさらに悪化させ、急速に人民を失望させるが、その場合でも強力な独裁制がおナチス支配の崩壊をくい止めようと、当面の成り行きには悲観的判断を示した。

そして社会民主主義者達に「人民の多数が革命政党に背を向けている限り、バリケード、ゼネストという闘争の最良の武器も無力」としナチスがなお人民に魅力を持ち続けている限り、無謀な攻撃的戦術を廃し「消耗戦」(Ermattungsstrategie)に徹することを求めた。そしてカウツキーの母国オーストリアの社会主義者、労働人民に対しても、独裁的傾向を強めるドルフス政権打倒の決戦に軽卒に踏み出し、「決定的な瞬間背後から我々を襲ってくるナチ」の勝利を手助けする愚挙を避けるよう忠告した。

そして両国の社民支持者に訴えた。「あせるな若者達、時は遅すぎない。我々のなすべき大事業は、目前でなくともそう遠くない。それまでナチスの国家権力への道を妨害し、我々の早過ぎる力試しで消耗しないことこそ重要なのだ」

これらナチス批判にあらわれたカウツキーのファシズム観の特色はなんであろうか。

まず第一にはヒットラー主義即ちドイツファシズム台頭の原因論である。マルクス主義者としてカウツキーも資本主義社会の矛盾の爆発としての大恐慌をその主要原因としている。しかしそれとともに強調するのは「ヴェルサイユの平

説
和」の敗戦国ドイツにもたらした否定的作用である。しかも「ナチス勝利」との関わりでいえばこの二つの重圧のドイツ国民にもたらした社会心理的作用（現体制への不安、不満の増大）が強調されており、それに比して経済的支配層（カウツキーの言葉では大地主、重工業者、銀行家という「大搾取者」とナチスの結びつきはさほど分析も強調

もされず、その結果ヒットラー主義は現体制に絶望し、救済者を求める中間層、労働者の一部、それに自らの特権の回復をめざす「大搾取者」の三者を支柱とする自立した新興政治勢力という側面が浮き上り、これら三つの階層とナチスの結びつきの強弱、相違は不明確なままである。

特色の第二としてはナチス台頭の原因分析とつながるが、反議会主義、暴力、独裁志向という「ヒットラー主義」の政治的側面が強調されていることである。逆にいえばナチズムと矛盾を深め混乱する資本主義体制の将来についての立入った説明がみられないのである。そしてこの「政治的ファシズム」論という傾向と社会民主主義者の反ナチ闘争の中心課題としての「一九一八年の革命の成果」⁽¹⁵⁾ 民主共和国の防衛の強調とが結びついている。

特色の第三はナチス攻撃との関わりでコミニストが厳しく批判されていることである。その批判は二つの面で行なわれる。一方ではナチスの政治的性格の重視とともに、反共和国、反議会制、独裁制志向ということでコミニストとナチスが同一視され、左右の「ラジカリスト」、「独裁者」として非難されている。と同時に他方では「主敵ナチス」との闘争という点から「社会民主主義主敵論」をとり続ける反ファシズム戦線の分裂、妨害者という評価をも下していることである。⁽¹⁶⁾

もとよりこうしたコミニスト攻撃の立場は当時の社民勢力の指導層においては支配的傾向であった。しかしカウツキーの場合徹底した反ボリシェビキという立場からファシズムへの闘争においてもよりきびしいコミニズム批判、彼等との共闘否定論が導かれたのであり、彼の現実のコミニストへのきびしい評価は社会民主主義陣営内でも

強硬な反対論を生んだほどであった。⁽⁷⁾

第四に注目すべきはカウツキーの反ナチ抵抗論である。彼はナチスに対する社会主義勢力の敗北の原因をもつばらドイツ人民の政治的関心の変化に求め、この状況における抵抗指導のあり方に対しては、ほとんど反省的な検討はなされず、さらに今後の反ナチ闘争の方法についても人民の中での「ヒットラー熱」の存続を理由に「消耗戦」を強く求めているのである。とはいえこうした政争の重大局面にあって、未来の勝利をばく然と期待しつつ、大衆の意識水準を主たる根拠にし、「決戦」の回避を求めるカウツキーの対応様式はこれが最初ではない。⁽⁸⁾

(1) Vorwärts, 12 September 1930 (朝刊)。

(2) 「了解の政策が内政、外政ともにまさに必要である。どのような党も人民の中でも議會でも絶対多数をえられない故に内政では連立政府の形をとらざるをえない。多数派への少数派の統治はただ残忍な暴力の方法でのみ可能である。この方法を回避しようと思ふものは連合せざるをえず、第三の道は存在しない」と述べている。ibid.

(3) Vorwärts, 1 Januar 1932 (朝刊)。

(4) K. Kautsky, Einige Ursachen und Wirkung des deutschen Nationalsozialismus, in: der Kampf, Jg 26 (1933), Nr 5, S. 235-245.

(5) ファシズムの政治的側面批判の強調は当時の社会民主主義指導者の共通した特色である。これについては拙稿「ワイマール共和国末期のドイツ社会民主党の指導路線」(『北海道教育大学紀要—社会科学編』二九号(一九七八・九))参照、ファシズム分析でのこの特色は、社会民主主義者に反ナチ、共和国防衛を前面に出させた動因として注目した⁽⁹⁾。

(6) 下記の面を引く。K. Kautsky, Kommunismus und Sozialdemokratie, S. 274-279. Demokratie und Diktatur, S. 54-58, 參照。

(7) Zur Diskussion über Sowjetrußland, でのF・アドラーのカウツキー批判参照、ここでアドラーは「あなた(カウツキー)もポリシエビキも、同じように、社会民主主義者とコミュニニストの分裂の解決策は、一方の他方の打倒という、勝利の平和以外に

ないと考えているようだ。社会主義労働者インターの圧倒的多数はそれに対し、話し合いによる平和の前提を見出すことを急務と考える」と述べている。(ibid. S. 62)

(8) 少なくとも三度、決定的な政治局面でカウツキーは「決戦回避」「消耗戦術」を社民黨員、労働人民に呼びかけた。プロイセン邦議会三級選挙法改正闘争(一九一〇年前後)、第一次大戦でのドイツ参戦時、ドイツ革命時。このことは「カウツキー主義」の基本的性格を示すものか。「カウツキー主義」については E. Mathias, Kautsky und Kautskyanismus, in: Marxismus Studien, II, 1957, S. 151-197, 参照。

まとめにかえて

カウツキーの「戦間期」の理論面を通じての現実の社会主義運動への関わりには三つの重点があつた。第一にはポリシェビキとコミンテルンの、ロシアそして世界各国での政治的実践に対する「攻撃」ともいべききびしい批判、第二にはワイマール共和国を中心とした平和的、漸進的社会変革への理論的根拠づけ、そして三十年代に入つてのフアンズムへの闘い。

そしてこの現実政治への関わりの中でカウツキー的立場をより強く特徴づけているのは社会変革における「民主主義」の意義の重視と進行中の「ロシアでの変革」への大胆な批判活動である。

「民主主義」の重視についていえば西欧諸国の市民常識として定着していた「市民的自由」の保障と議会制を核とした民主主義像をモデルとし、その「階級拘束性」「手段価値的役割」を強調する立場を越え、資本主義国家での「民主主義」の擁護、それを通じての「社会主義」の実現を訴えつづけた。ナチスの迫害を避けての亡命地アムステルダムでの死の直前の発言はカウツキーのこの期の実践的関心の核心とそれへの熱意の強さを見事に表現している。

「ロシアでの独裁の崩壊ではなく、その権力の存続は現代の労働者階級の解放闘争にとって非常な脅威、重大な損失となっています。民主主義がなお存在しないところでは、政治的な自由を実現することは労働者層、社会民主主義者にもっともさしせまった課題になっています。労働者はまず経済的に解放されねばならず、それによって初めて本当の民主主義が実現されるという考えは全く誤りです」¹⁾

そしてカウツキーのロシア革命、ソヴェトロシアへの批判も、当初からその変革否定にむけられたものではなかった。その初期にあつてはレーニン・ボリシエビキがロシア社会の現状を無視し、他の変革政治勢力を暴力で抑圧し「社会主義革命」をめざしていることへの抗議であり、それにプロレタリアート主導の「民主主義革命の完成」を対置したのであつた。そしてスターリン体制下にあつてはロシア革命の現実と理念のずれをあげ、ロシア社会の民主化の可能性をめぐって極めて能動的に発言しつづけた。

しかし現実の「革命」への批判活動は理性的な理論闘争とは全くなじまない。当時のロシアでは「体制変革」をめぐって諸政治勢力、さらには政治指導者の間で生死をかけた権力闘争が展開されていたのであり、ボリシエビキ路線の信奉者にとってカウツキーの行為は単に「敵を利する」にとどまらず「反革命、資本家階級の尖兵」とみなさざるをえず、彼の革命批判の意図とその具体的指摘は革命運動の指導者によつてもつぱら党派的、権力闘争の配慮から反論され、真剣な検討の対象にはならなかつたといえよう。

しかし今ロシア革命への「攻撃者」カウツキーについて考える場合少なくとも二つの点で積極的再検討が必要である。その一つは現実のロシア革命への敵対者であつたこととロシア社会の変革への積極的協力者たることは同一ではないということである。カウツキーの対案のような「ロシア革命」の道ではロシア社会の変革は見通しえなかつたであらうか。

説

これと関連して再検討されねばならないのはカウツキーが「革命理念の否定」として指摘したボリシエビキ統治下の様々な具体的事実についてである。ロシア革命から六十年、革命への冷静な反省が可能となり、「スターリン体制」批判も常識化している現在、当時のカウツキーの主張から多くの有益な検討課題を見出しうるであろう。

論

(一) Zivko [Papalovich (ユーゴの社会民主主義者) / Mein geistiger Vater, in: ein Leben für Sozialismus, S. 82, 以下の類似の重要発言としてカウツキーのP・ガーヴィエ(ロシアの社会民主主義者)への手紙がある, ibid, S. 109-110 (村瀬氏の「ヨーロッパの社会主義像」に邦訳されている)